



高村昌憲個人誌

パープル

第48号

高村昌憲・個人誌 « *Takamura Masanori · Kojin-shi* »

詩

お花見の心 高村昌憲

翻訳詩

アラン『ガブリエル詩集』（十五） 高村昌憲訳

雷雨

記念日

香水

ヴィーナスへ

評論

初期プロポ断想（三十一） 高村昌憲

1 ブルドワ判事

2 ソルボンヌ大学生

3 不況

4 自由意志

編集後記

表紙の写真はカタクリの花々（撮影：藤木典子氏）

花々を見ると誰もが春を感じる
寒い冬には咲かない摂理の中で
長く蹲った冬の終わりを告げる
他者への思いを伸ばす青春の腕

やがて人を見るように桜の花を見る
肩を組んだ雷同と酔った眩暈の行進
やがて生きることと死ぬことを考える
歴史の中の自分を確認したがる競争心

万葉の人々のお花見とは梅だった
寒い季節でも最初に咲く花だから
表すにも最も待ち遠しい花だった
何よりも最初に見る花は季節の宝

自分を縛るなど崇高な卒寿の人は論ず
連帯の心に散々泣かされて来た生涯
この季節には最早独りだけの美を探す
他者を相手の挨拶も議論も要らない

まして気晴らしも虚栄も要らないのだ
流れる桜の花から梅の孤高を目指せ！
先鋭の梅の花から死者を思い出すのだ
考える者だけが感じるお花見に戻せ！



山形県鶴岡市にある玉川寺（ぎょくせんじ）の枝垂れ桜（2016年4月23日撮影）

雷雨

澄んで大変に優しくそうな空は何処？ 見てご覧！
水平線の辺り一面では雷がごろごろ鳴っている
金色の総飾りを付けたぼろ切れが糸を垂らしたままだ
あなたの睫毛の下の鉛のように重い雷雨のことだ
その日はあなたの疲れたような魅力で暗くなる
美しい薔薇は大変果敢無く何時も脅され
突然の重苦しさと涙で溢れたような香気
若々しい夏は花々の虐殺を始めている

偉大な空が怒りの力を育てているのは
あなた？ それとも芽生えという大地の不思議が
もしもあなただったら 火矢の下で飛び跳ねるのは誰？
薔薇とは何？ 均整のとれた力を使って
神々の戦いである無限の遊びの中の私とは何？
放されたこれらの矢の飛翔を制止するのは誰？
天空よ おゝ善良なあなたの愛は豊かで
私たちの花々と果実の上では何時も雷が鳴っているの？

そして既に 閃光や雷鳴の爆弾のような音の上に
鳩たちが羽ばたきを響かせて大空に現れるのを私は見る
既に湿っぽく あなたの眼のように優しく澄んで
絹の睫毛のような光線の縁飾りは
翼の羽ばたく音の下に真っ青な濃い色を隠している

私はその魂の稲妻を認めた それは彼女だ！

記念日

長い草のベッドで何て柔らかな眠りだろう！
そこでのあなたは突然に動き素晴らしく美しい声！
あなたは秘密の泉と眼に見えない水を
しなやかな葦に求めながら出掛ける
全てがゆったりとした寛衣のような緑の襖で眠る
風は歌い パニックになったようなフルートの演奏
官能的で頭がくらくらする忘却が干草を積み上げ
異教徒のよい香りが季節を祝福している

窪地の麝香の香りのする野薔薇が淫らに
服の紐を解き しつこいマメ科の草と結び合う
紫蘇科のマヨラナは夢見る その下でタイムの草が
私の溶けてしまった夢に野生の平和をもたらす

あなたが私に望むのは 苔の生えた洞窟のよい匂い
鹿毛色の暖かい毛皮 繊細に織られた洋服なの？
あなたは目覚めた牧神 血がみなぎった上半身
あなたは草の窪地から立ち上る極めて強烈な思い出に
強力な香気を混ぜ合わせたいのは何故なの？
鳥さえも活力がなく 私の心の下
赤い欲望よりもその矢は素早くはない

しかし全てが救われる 何故なら愛は勝つから
立ち上がっているのは決して狂った欲望ではなく
決して優しさを生んでいく興奮でもない
それと同じ心が恐るべき神に傷つき
この美しい場所である花々の上に眠りに来る
おゝ私の愛しい葦たちよ あなた方も同じなのだ！
あなたの望みは私の自我 私の水の精 私を愛するあなた

私はその日の夕方 これらの同じ畑の溝の上に
盲目の風が渦巻になって回るのを見過ぎていた
そこでは埃や翼のような藁が踊っていた
幸福と不幸で私たちの魂は混じり合っている
どんな深淵へ？.....

この肉体が最高であることを知ること

このしなやかな腰 大変に野蛮な拒絶と

大変に穏やかな奉納との優しい一致は

金色の埃と狂ったサラバンドでしかない！

おゝ私の小麦の藁よ 私は言った あなたは何処へ行くの？

しかしあなた自身は 余りに透明な氷の中で

全てのものが反射して輝くお気に入りの幸福にさえ

無関心な海賊や美德のことを取えて話すの？

大空の移り変わりに備える冷たい泉

そして真紅の時間と蜂蜜色になった時間と

薄暗い雲と祭日の明るさが

意味のない激しい嵐と単なる退屈を生んでいる

おゝ眼が青くて金色の頭は 自分を見るために時が過ぎ

氷の上に身がかがめることも知らないのだ！

あなたも過ごしたが 私の中にはあなたのイメージが宿り

虹色になった海流の下のその底のあの世では

葦が姿を曲げながら さざ波をよく立てている

あなたの美しい肉体の影が これらの水に映され

これからは記憶もなく それらの光景に混じり合う

そして忘れっぽいきらきらした光沢が変化するのは全て

あなたと似ていて あなたの両眼を描く

渦は全てがあなたの大切な肉体にぶつかるだろう

私が存在して自己を知ったのは変らないイメージの中

眼には見えないが存在するあなたが生まれる私の心の中

このようにしてこの襪の中に私が閉じ込めた香気は

私が愛したこの窪地の思い出とエッセンス

牧草地に息をする一頭の雌馬のように

あなたは跳ね 酔ったような激しい動きを感じ

性急な激しい欲望と名づけようのない恋

あなたが「いや」と言っても狂ってはいない

思い出しなさい.....

しかし泡と煙のこの遊びは

あなたに何時も同じ愛された姿を描いている

大空の嵐が最後には静かになる時

同じ大空が微笑し 同じ両眼が生まれている

おゝ不誠実で貞淑な自然よ それは同じものだ！

おゝ海よ 輝く空よ 透明な泉よ 私はあなたを愛する！

(ガブリエルへ 一九三〇年七月二八日ペシーにて)

香水

雉鳩のように瞬くあなたの瞳を私は愛する
翼の下に見えていた大空の青い色を私は愛する
興奮してあなたの喉が優しくくうくうと鳴り
私の愛しい優しいあなたは全てが私のためであると知っているの？
私がゆっくりと口づけする求めに応じたあなたの項
そして肩と私を誘惑するあなたの腕の窪み
そしてミルク入りの美味しい果実の匂いがするあなたは
大変に淡く清純な眠りに 秘められた熱情
甘い贈り物の愛撫に一輪の薔薇が混じり
焦げた草の匂いに少し眠くなっているのが分かる
そしてゆっくりと広がっていく水が元に戻るの
私たちの縛られた手足よりも柔らかくない結びを作り
半分眠ったようにあなたはその日の朝を延ばし
私たちの夢を混合させているのは快樂の時間

あゝ！ 夢想は甘美だ……

目覚めは苦い

この広大な隔たりとこの広大な海よ！

あなたは捕らえ難いものを再び見付けることが出来て
この薔薇の香水の中で私の存在は軽くなる！

(ガブリエルへ 一九三〇年八月五日)

ヴィーナスへ

緑色の大空に黄金の水滴のようなヴィーナス
蒼白いあなたは日が沈むと輝いている
赤い水蒸気や重く垂れた霧の純粋さを持つ
あなたは軽々とした雲でできたマントを投げる
神よ！ 思い出は心を目覚めさせ
あなたは再び夢を見て 私たちの愛が勝つのは
幸福なあなたの光による強烈なエーテルまで
そしてあなたは恋する夜の前奏曲の兆し

おゝ抱き合う幸せよ！ おゝ夕べの眩きよ！
二人の話に甘い沈黙が坐りに来る
多くを語る大きな瞳の沈黙よ！
そして酔い心地で演奏する所に薔薇が目覚め
ミルク味の果肉に燃える欲望の火のように
おゝ！ 好かれることもなく自分で楽しむ時間
全てがああなたの香気 あなたが全てであり
花は微笑し 鼻孔が吸っている花の息吹よ！
あなたの胸は私の掌の中で眠っている
穏やかな翌日のための思い出と約束
あなたの魅力的な口に高められていく僅かな空間は
純粋な処女であり そして既に恋人である

周囲の全てが納まり 世話を焼き 仕事をする
その影に新しい顔つきのデッサンが描かれる
愛は魂というものが呼吸しているようであるから
最も冷たい顔がああなたの微笑を真似ている
楽しそうに眩いている葉が揺れながら
私たちは風のようにゆっくりと揺れて行った
光る航跡を私たちの後に残しながら
海賊の私たちは押し潰した寒冷紗や影に酔う
ベッドから最高のものを略奪するために進んでいた
同じ息で巻かれた彼自身が
二重の肉体になるまで私たちを揺すり
同じ眠りと夢想の中に私たちを沈める

深い森の底の方にふいに立ち現れるあなた
あなたが見えなくなった正にその時にヴィーナスよ
もしもあなたが役に立たない夢を大洋に語る
砂漠の上で彷徨う者の姿を見たならば
彼に話してご覧 私たちの子供たちの喧嘩を見るあなた
勝ち誇ったような炎を私たちに照らすあなた
並木道の端に光を放って輝いていた
見知らぬ大地を知らせている灯台のように
今でもまだそれを愛していると上手く言え
私たちの愛というランプ そして私が有難うを言うのは
優しい淡い思い出 陽気で楽しかった年頃の時
あなたが私に運命づけたも同然の苦しみ
あなたのミルクのような項に金色の豊かな髪
全てが眠るや否や 私の裡に発芽が起こるヴィーナスよ

(ポートランドのガブリエルのために 一九三〇年八月二三日)

1 ブリドワ判事

ブルドワ判事は、フランソワ・ラブレー（一四八三？～一五五三）の第三之書『パンタグリユエル物語』の三十九章から四十四章までの中で述べられている人物です。ブルドワは長年に亘り判決を骰子の目で決めていたのです。原告にとって自分に有利な判決になるかならないか、全てはブルドワの骰子の目にかかっていたのです。「私（アラン）は考えれば考える程、ラブレーが話しているブリドワという名の判事に感心します。彼は訴訟手続きの金額が巨額であった時は、骰子一抛で裁判を終えていました。

彼は骰子に従っていました。そして、それが大変に合理的でした。各々の法律が何時も明確であるなら、決して訴訟することもないでしょう」とアランは一九〇八年五月三十一日のプロポに書いています。

訴訟になるのは、それに関係した各々の法律が明確でないからです。何故なら明確であれば、何も裁判をして争う必要はないからです。法律に書かれているように事は決めるからです。ところが甲にも乙にも言い分があつて、どちらも自分の方が正しいと判断する余地があるから訴訟が開始されます。そして、裁判を終える上で何が重要と判断する要素となるか、それも人間によって区々なことは十分に考えられますから、訴訟の内容が複雑になればなる程、あらゆる判決が可能になります。自分の将来を占い師に占って貰うような時に酷似します。現実の世の中は複雑であり、色々な事が起きますから、占い師は何を言っても当たります。但し、明確な時間を定めれば、殆どの占いは外れます。仮に二〇一七年二月十六日に富士山が噴火すると占ったとしても、その占いは殆ど外れることでしょう。

しかし裁判の場合は、時間を定めない占い同様に、如何なる判決も当たりなのです。甲の言い分を採用しても当たりであり、乙の言い分を採用しても当たりです。各々の言い分にはそれなりの道理があるのですから当然です。

ところが骰子一擲で結論が直ぐに出ても、判決までには長い時間を掛けなければなりません。骰子で即決出来ても、書類と時間は必要である、とアランは次のように書きます。

「ブリドワは言います、「書類は必要ないが、時間と費用は大いに必要だ。訴訟したい人々の権利を十分吟味する前に、訴訟したい人々のことを全て考えるようになるからだ。もしも訴訟に勝って、示談よりも費用が高くならなかつたなら、誰もが訴訟したがるだろうし、全ての事件が保留される。私が遅くても、それ故に大変に要領が良いのだ。今回も使用した時間は、節約した時間である」。

以上はブリドワが言っていることです。しかし、そう言うのは大変慎重です。そのことは制度に反することになるのでしょうか。いいえ、違います。彼は口頭弁論の時に眠っていて、もう何も聞こえなくなると目覚めて、両眼を擦って骰子を振ります。以上が真相です。出来る人は骰子をしゃぶって下さい。

すらりとした優雅な蜻蛉のように、彼は水面をあちこち飛び回る冷やかし好きであることを忘

れません。ラブレーの皮肉の門は、小石のように底まで行くのです。」

以上の様にして、アランはこのプロポを結んでいます。長い時間をかけてから骰子を振るのです。訴訟して判決するまで行くには、もっと長い時間がかかりますし、書類も沢山必要になります。つまり骰子を振って示談で取めれば、訴訟する両者にとって〈要領が良くなる〉し、時間も節約出来ます。訴訟した人々は、最後の判決を望んでいるわけではありません。そうではなくて、所謂決着すること、白か黒かを裁判所に望んでいるのです。更に、それは公平でなければなりませんから、困難を極めます。何時までも決着が付きません。結果的に骰子で決めることが最も公平である、とブリドワは言っているのであり、「ラブレーの皮肉の門は、小石のように底まで行くのです」。それが真実の重みになるのですから、訴訟する人々に対しては〈真相〉を明かす訳には行きません。

そこにある皮肉は、何も裁判に限ったものではありません。政治においても然りであるように思います。白であろうと黒であろうと、どちらかに判断することが〈要領が良くなる〉のです。例えば集団的自衛権を認めた安保法の改正についても、真に正しい判断でなくても構わないのです。正しい判断には、書類が少なく時間が短いことが重要になります。民主党が政権与党であったなら、なかなか結論を出さないために、恐らく国民投票という判決まで進むことになるかも知れません。大量の書類と長大な時間が必要になり、骰子を振る好機がなくなります。

権力を持っている与党の政治家は、政治とは判断力である、と良く言います。判断した内容が公正で正しいことか否かを、殆ど明確に説明しません。憲法違反であるとかないとかを問題にしません。決まったことが正しいことである、という逆説を生きねばならないのです。ところが政治家たちは、正しいことを決めたが如く発言しますし、自らにも納得させています。誠に笑止千万ですが、そのことを予感していますから、殆どの政治家は自らが決めたことを修正しませんし、その結果についても責任を持ちません。間違っていたことを修正するのは権力の中枢にいる者ではなくて、野党の者であり、地方の者であると言われていています。恰も明治維新は徳川幕府の中枢の者ではなくて外様の薩長の者たちによって行われたように、あるいは産業革命がロンドンではなくて地方のマンチェスターから起こったように、修正する行為は権力の中枢から始まることは少ないようです。（完）

2 ソルボンヌ大学生

歴史とは、年代だけ理解して済むものでないのは明らかですが、それは過去の時間を現代の時間に置換して思考するもののようです。従って、仮説の上に仮説を構築して行くようなものであり、「新しい記録を作る方法が重要である」とアランは良く言っている、というソルボンヌ大学生の話から一九〇八年六月一日のプロポは始まります。

「先日、ソルボンヌ大学生が私（アラン）に苦勞話をしました。彼は私に言いました、「七十四人の歴史の教授たちはそれまでの過去の時代の記録を壊して新しい記録を作る方法が重要である、とあなたは良く言っています。しかし、あなたは歴史家たちという大集団のことを忘れています。彼らはフランス語、ラテン語、ギリシア語、ドイツ語、英語あるいはイタリア語を教える口実の下に今まで歴史を作り、作者たちの詳細な人生を語り、ラシーヌの洗礼場面の台詞を重々しく読み、あるいはゲーテが創った両親の結婚場面を読んで、彼ら作者たちの作品は除いて、作者の全てを一言で認識しています。歴史という害虫は、思想の崇高な制度まで囓ります。昔は人が語る時、青春を説明するためにプラトンやデカルトやスピノザの理念を語る人間がおりました。今は最早、説明されることはありません」

要約して一言で言う行為に思想はありません。私たちはアランが言う〈青春〉と、歴史学者が言う〈青春〉との間に大きな相違があることを予感します。つまり同じ言葉を使用しても、全く別なものと理解することは沢山あるのです。歴史学者たちは〈プラトンやデカルトやスピノザの理念を語る人間〉でないのは明らかです。何故なら、現代にはプラトンやデカルトやスピノザがないからです。歴史学者たちにとってプラトンは歴史にならないのです。歴史学者たちは「同一作品の出版者の違いを比較して満足したり、蝶のコレクションを見せるように色々な出版社のものを見せてくれます。彼らが文学に手を染めるや否や、精神のことが全然思考されていないと皆から言われます。かくして彼らは勉強して、出版社や序文や注解を綿密に調べます。カードを作り、そして私たちに書き取らせます。私たちの精神を形作るために、彼らは私たちにカードを作らせ、私たちも又作ります。今、私はカントの哲学を論じている全てのフランス語の本の表題と出版日を研究することになっています。図書館司書の仕事です。そして、もしも私たちのうちの誰かが、時に何らかの強力な原則を説明しようとするれば、最悪の意味がなくもないことを彼らは講壇の高い場所から言うのです。〈それ故に、現代の精神の習慣や観念と共に、二世紀も昔の形態を理解しようとしてはいけない。理念は歴史的事実を生む。何も削らず、何も加えないで、その儘で理解しなければならない〉。以上は、私たちに配られた知性のパンであり、私の理解力は小さな紙で一杯です。私は登録されたアカデミー会員の如く、二十歳の老人なのです」。

従ってソルボンヌ大学生は、思想に触れることも無く、図書館司書のような仕事しか出来なくなつて、不平を言い、そしてどうすれば良いのかアランに忠告を求めます。アランは冷静に言います。

「それは大変簡単です。その歴史家たち全員に非難の声を上げなさい。大声で考えを言いなさい。あるいは最善なのは、彼らがあなたを排除することで、あなたは会計係とかセールスマンになることです。あなたは直接見て、物事や人間を知るでしょう。あなたは物を売ります。物を

買います。あなたは夢中になります。あなたはエジプトのファラオの歴史をたどたどしく読む代わりに、今日の歴史を生きます。他のことに関しては時折、私を見に来るでしょうし、私は序文も伝記も注も解説も無い美しい本をあなたに貸すでしょう。かくして生きているものと永遠なるものとの間で、あなたは人間として立派な人生を送るでしょう」。

それに引き替え歴史学者の仕事は、毒にも薬にもならない些細な〈新事実〉ばかりに価値を置く、学問のための学問になり、例えば学位のための学問になります。観念も思想も無い事実の収集家になるばかりですから、人間を知ることが無く、人間としての魅力が無くなります。つまり、譬え歴史上の大発見をしても、機械が発見したが如く、そこにいるのは大人になり切れない〈二十歳の老人〉なのです。真に現代に働きかけるのは〈会計係とかセールスマン〉です。何故なら、彼らは〈直接見て、物事や人間を知る〉からです。ここにアランの思想があります。抽象から具象へ行く時には必ず抜け落ちるものがあり、具象を把握することが真実への道であるという思想です。従って、数学の定理に倣って現代社会を予想しても、必ず抜け落ちるものがあり、定理通りの社会になるのは不可能であると断言出来るのです。（完）

3 不況

アランが語る経済の話は、数式を見るように理路整然としています。勿論、経済は社会学の一つと言えますから、数学とは異なります。しかし、一つ一つの事例を積み上げて行くその方法は、社会の現象を数学のように理解しようとしています。つまり独断と独創を出来るだけ抑えて、文学的芸術的思考から乖離しようとしています。何故なら、経済とか社会学というものは、誰でも出来るだけ多くの人々に理解させるのを可能にすることが真実への近道でもあるからです。そして実際の状況は実生活に直結しますから、深刻な場合も多くあります。

例えば一九二九年十月二四日の木曜日にニューヨークのウォール街で株価が大暴落して、その後の経済活動が大きく落ち込み、世界的大不況の引き金になりました。所謂「暗黒の木曜日」です。あるいは一九七三年十月に、中東戦争により日本向けの石油輸出が削減されるとの通告があり、狂乱物価と異常インフレが起きました。又、同じく我が国では一九九〇年二月から、株価の暴落から始まった「バブル崩壊」の長い不況が始まりました。「空白の十年」という不況ですが、その影響は現在も続いていると言う人もいます。不況は仕事が無くなって失業者が増大しますから、不幸も増大する深刻な事態です。多くの経済学者がその理論を確立しようとしています。やはり数学のような絶対的な真実は未だ無いのではないのでしょうか。しかし、「暗黒の木曜日」の二一年前の一九〇八年六月三日に、アランは既に経済の基本的なことを表している「不況」という興味深いプロポを書いておられますからご紹介します。

「少なくとも振り子は大変に単純な器具です。私は糸に重りを付けます。その重りを右の方へ持って行き、そして動かします。その重りは平衡点に達するとだんだんと速くなって弧を描いて落下し、中心点になると最早落下せずに軌道に乗って反対側に再び上昇して、推進力が少しずつ使われて停止し、そして再び落下します。それらの動きの中に、大富豪と極貧の間を絶えず揺れ動きながら、私たちが何時も目標を乗り越えさせる社会的力を把握しなければなりません」。

人間社会は停止することがないとアランは言います。海面が波で揺れているように、動いているのです。あるいは振り子が行ったり来たりするように、動いているのです。そうしてその動きの中から、大富豪と極貧が生まれます。私たちは社会の目標を何時も達成させる社会的力を把握しなければならない、とアランは言っています。

この〈社会的力〉の一つが経済力であるのは間違いないと思います。人間が生きて行くには経済力が必要ですが、そのために全ての大富豪を無くせ、と暴力的な革命家のようなことをアランは言うておりません。大富豪は振り子が動き続けるためにも必要なのかも知れません。勿論、振り子の動きが速くなって、その揺れが余り大きくなるようにすることです。海面の波の上部と下部が大きくなることです。大きくなれば糸が切れて揺れが停止するかも知れませんが、嵐になって船が転覆するかもしれません。大不況となって、社会不安が広がらないようにしなければなりません。

「この気が狂ったような注文は生産を動かします。資本が提供されて利益が生み出されます。工場が建ちます。工作機械が唸り声を上げます。誰もが急ぎ、前年の注文に釘付けになります。従って、注文は最早増えなくなって、生産が落ちます。注文が再び増える時は、既に生産が減って

います。皆に供給されるまさにその時に掛けで売り始めますし、あるいは割引が大きくなって生産すれば損失が出るようになります。その時は値引き販売から競り売りに変わります。利益は小さくなります。資本金や余った財産は別の物に使われるようになり、生産者は沢山の機械を持つようになり、現金が足りません。今は、景気の波の谷にいます」。

かくしてデフレとなり、不況が訪れます。金融緩和にして現金を沢山の供給しますが、なかなか〈社会的力〉が不足して、元の揺れに戻りません。

「如何に世界全体の事柄が同じ種類の法則に従っているのかを理解しなければなりません。景気が上昇している時期がありますが、その時は物の値段が全て上がります。それは自明のことです。沢山の稼ぐ人は、沢山の物を買います。その上、値上がりは購買力を落とします。というのも人々は自問するからです。明日はもっと高くなるだろう。結局、高くなった物ばかりを買ってお金を支払う労働者は、もっと高い賃金を要求し、そのことは原価を高くします。値上がりは値上りを生みます」。

皆がお金を沢山の稼げば、お金を沢山の使いますから皆が満足して、波は上昇しますが、やがてお金が不足して来ます。「手形を軽率に切って破局を迎えます」。破局を迎えないようにするためには手形を切ったり、借金したりしないことです。自分が自由に使える資力の中で揺れることです。従って「けちであることと、慎重であることが、そこで叫ばれて、購買は少なくなります。売って稼ぐのも少なくなります。お金は一方に詰め込まれ、他方に利益が生じます。値下げは購買力を妨げます。何故なら誰もが自問して迷っているからです。待ちましょう、明日も未だ高くないでしょう。値下げは値下げを生みます。皆の稼ぎが少なくなり、お金を使うのも少しです。皆が不満です。ギリシア神話のカッサンドラは戦争を予言します。そして、セレブロフは〈現代意識の不安〉についての本を書きました」と結んでいます。結果的にアランは戦争や大不況を予言したことになります。

重要なことはアランが予言したことではなくて、戦争や大不況を防ぐことです。そのための方法を、残念ながらアランは明確に語っていませんが、自ずと推測することは可能です。経済の揺れを大きくしないことです。もっと具体的に適切に言うなら、大富豪と極貧の差を大きくしない政治力と文化力が必要です。世界で最も裕福な大富豪六二人（五年前は三八八人）と、経済的に貧しい下位半分の三六億人の総資産が殆ど等しいという状況（国際NGO「オックスファム」）は、もう少し良識的なものに変えなければなりません。それを可能にするのは、上位の六二人でもなく、下位の三六億人でもないでしょう。彼らには困難なことでしょう。何故なら、現状を変えなければならぬ勇気と過酷な努力が余りに大きい当事者に該当するからです。戦争や大不況を回避するためには、残りの上位半分の三十六億人の力が必要であり、それは私たちの責任ではないでしょうか。小さなことで良いから出来ることから始めることです、とアランなら言うでしょう。（完）

4 自由意志

哲学とは、ご存知の様にギリシア語で〈智を愛すること〉であり、愛智であると言われていますが、そのためには人間の自由が必須でもあります。自由に思考出来なければ真実も把握出来ません。例えば政治には奸計が必要であると人に言われてその儘に認識すれば、奸計をめぐることが政治の実体になるばかりです。ここには自由に思考する方法が蹂躪されています。アランは、「自分が思考の主人であるか否かを先ず知らなければなりません。それというのも自分が思考の主人でなかったなら、取り返しがつかないからです」と、一九〇八年六月九日のプロポに書きます。教育は、自ら思考する術を知る行為かもしれませんが、それと共に他者の思考を模倣する行為が前提にあるためでしょうか、「文化とはまさに教育とは別のものです」とアランは『神話序説』（一九四五）第二章の九の中で言っています。アランの言葉は色々と誤解を生むことが多いのですが、この言葉も取分け教育関係者には誤解されるように思われます。しかし、教育に文化があると考える教育関係者がいるとすれば、益々教育に文化が無くなるように思われます。何故なら文化とは、まさに自らの思考を耕す行為であり、自ら活動し創作する行為であるからです。決して他者に教えたり、他者を動かして育てる行為ではないからです。そのためでしょうか、アランは教職に身を置きながら、生涯に亘って著作活動を継続して、文化活動を維持していました。

「それ故に、私は自分で出来ることをしようと思います。私は満月のことを考えたいと思います、そして考えます。インドのフランス自治領ポンディシェリーのことを考えたいと思います、そして考えます。私は貨幣の流通や為替相場のことを考えたいと思います、そして考えます。この様にして私の思考は主権者になります。それは大地や大空を踏破します。自分の足で立ち、自分で飛び立ち、小鳥のように自由です。人は私の手を縛ることが出来ますが、思考を縛ることは出来ません。私を監獄へ入れることが出来ますが、私の思考は監獄から脱出します。私の思考は自由です」。

教育は文化で無いと思考する者にとって、誠に美しい言葉です。他者が出来ることを他者に教えるのではなく、「自分で出来ることをしようと思います」と思考する者に教育者の資格はありません。何故なら、最も誠実で真摯な教育者は自己を放擲した者でなければならない筈であるからです。僧侶や司祭という職業が人間の死を扱うように、判事は犯罪を扱い、医師は病気を扱います。いずれの職業も人間の悲惨や苦痛を扱いながら、それらを超える処に崇高さがあるとするなら、教師は人間の愚かさを扱いながら英知へ導くのですから、やはり崇高な職業と言えます。職業が崇高であるためには、人間の悲惨や苦痛や愚かさを伴う必要があるのかもしれませんが。しかしながら、教育における思考の内実は教師には稀薄であり、行為する主体は生徒にありますから、教育は文化とは〈別のもの〉になって来ます。教育は、独創よりも永遠の真理を求める行為を重視します。つまり教室の中には独創的な詩人や小説家がいなくても構いません。何故なら教育はそういう人間を求めているのです。

従って教室の中で自由に思考することは不可能とも言えます。「私の思考は自由ではありません。私の観念というものは数珠の珠のように繋がっています。私が満月のことを考えたのは、

三日月を見たからです」とアランは言って、アランが思考した観念は自由に選択したものと仮定したとしても、「その観念と前の観念には何らかの結び付きが何時も見付けることができます」。そうであるなら自由に思考することとは不可能ではないか、とアランは言います。何故なら、三日月の観念は満月の観念に結び付いているのであれば、自由でなくなるからです。

しかしアランは「止まれ、そうではありません」と言います。「もっと正確に言いましょ。私は中国のことを考えたいと思います。それが良く意味しているのは何でしょうか。確かにそれが意味しているのは、私が中国のことを考えることです。それを考えることもなく、物事を考えたいと思うことも出来ません。それ故に先ず中国のことを考えたいと思い、そして次に考えるということは不可能です。私の意志は私の思考に続きます。それ故に思考が浮かび出る時は、思考が浮かび出て欲しいという考えが浮かび出るからではありません。かくして私の意志は、思考について何も出来ないのが確かであると思います」とこの疑問は解決したと書いてアランは眠りに就き、このプロボも終わります。

人間は、意志が生まれて思考する訳ではありません。つまり思考するために意志を必要としている訳ではありません。感情や論理に基づいて思考することもあります。一般的には考えようとする意志がなければ考えることは不可能に見えますが、もっと正確に言うなら、思考して意志が生まれると言っても良いようです。思考は意志に関係なく浮かび上がります。従って「意志は、思考について何も出来ないのが確かである」のです。自由に思考することは、自然と意志も自由になります。私の意志は自由に定められたものであるか否か、と心配する必要はありません。自由に思考するだけで良いのです。有名な『幸福論』の最後の章（一九二三年九月二九日のプロボ）で「悲観主義は気分によるものであり、楽観主義は意志によるものである」とアランは書き始めていますが、〈楽観主義は思考によるものである〉と言い換えることも可能のようです。何故なら思考することは、自由な意志を持った人間が行うものであるからです。

いずれにしても思考と意志と楽観主義は密接に結び付いているものである、と言って過言ではないようです。そのために必要なのが〈自由〉です。譬え監獄の中にあっても、アランは〈私の思考は監獄から脱出します。私の思考は自由です〉と書いて、自由な思考と自由な意志を勧めています。それは奸計によって権力を保持しようとして、放送局の電波停止まで口にする政治家たちには手の届かない世界に映ることでしょう。（完）

◆十二月六日（日）に東京・吉祥寺の「永谷ハウス」で開催された「風狂の会」（主宰・北岡善寿氏）の川柳忘年会に参加した。題詠「進化」と自由詠を三句ずつ計六句を予め投句し、当日の参加者による投票での選考が行われ、全七四句から各々一席、二席、三席及び佳作を決定した。当日の選考結果については、原 詩夏至氏が「覚書」として、電子書籍の同人誌「風狂（二〇一六年三月版）」〈<http://p.booklog.jp/book/104239/read>〉において詳細に報告されているのでここでは割愛するが、ご参考までに私の作品だけを全てご紹介する。

- 1 進化して自由が消えた原子力（題詠）
- 2 進化かな？先祖返りもありますよ（題詠）
- 3 変革だ！保守の党首の進化論（題詠）
- 4 憲法の顔を潰した安保法（自由詠）
- 5 憲法を剣法と読む安倍晋三（自由詠）
- 6 クラス会渾名を先に思い出す（自由詠）

（1句、福島第一原発。2句、ダーウィン。3句、自由民主党。4句、第九條。5句、集団的自衛権。6句、四十五年振り。）

二〇一五年は川柳のバイブルとも言われている句集である『誹風柳多留（はいふうやなぎだる）』の初編が発行されてから丁度、二五〇年になる。川柳学会専務理事の尾藤一泉氏によれば、「川柳」としての文芸が定着するのは明治三〇年代末とのことであるが、それまでの江戸時代からは七・七音（十四音）の前句に、五・七・五音の十七音句を付けて競い合ったとのことである。例えば、「うんのよひこと うんのよひこと」の前句に対して、「役人の子ハにぎにぎを能く覚」と作って競い合ったのである。その選者に、号が「無名庵川柳」という人がいて、明治三〇年代末に「川柳」という文芸名になつたということである。俳句の場合は季語・切れ字という約束事があり、主に文語体である。ところが川柳の場合は、現代詩のように殆ど約束事が無く、口語体で自由であるから、誰でも直ぐに創作出来る利点がある。取分け、人生経験が豊富な定年後の高齢者の趣味としては、誰にも気が付かない「穿つこと」の出来る良い句が生まれる機縁が多いと言われているから、是非ともお勧めしたいと思う。

◆三月二一日（月）にブックログのパブーの電子書籍としてアラン著『神話序説』（高村昌憲訳）〈<http://p.booklog.jp/book/105233/read>〉を登録した。これはAlain, PRÉLIMINAIRES A LA MYTHOLOGIEの全訳である。テキストとしては、Alain, Les arts et les dieux (Bibliothèque de la Pléiade), Gallimard, 1958 に所収されているものを使用している。アラン（一八六八～一九五一）は『神話序説』を一九四三年九月十七日にアルマン（Hartmann）社から刊行したが、実際に執筆したのは一九三二年から一九三三年までの間である。従って、電子書籍として二〇一五年八月に登録した『神々』（一九三四）〈<http://p.booklog.jp/book/99643/read>〉よりも前に書いた『神話序説』は、『神々』の素描のような作品である。「パブーの電子書籍作成・販売プラットフォーム」から無料で検索出来るので、スマートフォン又はパソコン等を利用してご一読戴ければ幸甚に存じる。

◆三月二六日（土）に東京・恵比寿の日仏会館（五階）で行われた日本仏学史学会主催の研究発表会「中村光夫の青春とフランス体験——一九三〇年代から『戦争まで』及び一九四〇年代へ——」に参加した。講師は浜田 泉氏であった。浜田氏は、生前の中村光夫から七年間に亘り実際に指導されたとの由、現在は絶版となっている『戦争まで』から殆どヴェールに包まれているフランス留学時代の中村の実像も語られ、大変に興味ある内容であった。日本の自然主義文学が〈仮構性〉と〈社会性〉を欠落した「私小説」に特色づけられていることを指摘した『風俗小説論』（一九五〇）などによる所謂日本文学への批判は、浜田氏が言うように「日本に真の世界規模の近代文学への道を説き続けた」結果であった。その後、川端康成や大江健三郎がノーベル文学賞を受賞して、その成果は現実のものになったかのように見えるが、中村の批判は今でも決して杞憂ではないと思う。何故なら未だに日本文学は、自分の言葉で思考して十分に表していないように思えるからである。自分で思考して理解し感動したことから出発しなければならないのに、虚飾に満ちた通俗的慣習の中に自分を嵌め込もうとする努力しか見えないのである。つまり日本文学は思考していないのと同じように見える。勿論、日本の詩歌にも思考が無いように見えるから、隠喩ばかりが眼につくのである。思考が無いから感覚も感情も感じられないのである。考えれば分かることが、考えないから分からないのである。感覚や感情があるから思考するのではない。「何も考えない人は何も感じません」とアランは『思想と年齢』（第一部第五章「疲労について」）の中で言っている。そういうことを時々言うのがフランス人である。第二次世界大戦直前までフランスにいた中村は、「私小説」を通して日本文学の弱点に気付いていたに違いない。まさに考えない文学が政治に敗れていたのであり、そのことを中村は批判したかったのだろうと思う。

「奴隷の平和よりも王者の戦争を！」と書いた亀井勝一郎の如く、当時の殆どの文学者の思考が停止していたのは間違いないだろう。中村光夫の批判は、現代の文学や芸術がもう一度熟考すべき問題だろうと考える。何故なら現代にも屢々逆説的に思考の停止が垣間見られるからである。

◆四月三日（日）に東京・調布の神代植物公園で行われる「風狂の会」恒例のお花見に参加した。丁度、満開の花模様であった。東京の開花宣言は三月二一日であったので、よくぞもってくれたと思う。春に咲く花には黄色が多いと言われる。菜の花、ミモザ、連翹、山吹、ロウバイ、タンポポなどの他に、定番のチューリップ、パンジー、薔薇などにも多い。春の色は黄色かな、と思うこともあるが、やはり桜のピンクには叶わないように思う。量感的観点から圧倒的に違うのだ。しかも僅か二週間程度の開花期間が、桜の木としての表象を決定しているのである。もしかすると現実の美には長い時間は必要なく、ボリューム感としての助けを借りて記憶に残れば、表象の美として持続して行くのかも知れない。考えて見れば夏目漱石の小説も、バルザックの小説も、十年足らずの時間の中で開花したものであった。桜の花を見ながら、ふっとそんなことを考えた。当日の参加者は次のとおりである。出雲筑三、北岡善寿、倉田武彦、高 裕香、神宮清志、鈴木房江、高島りみこ、高村昌憲、富永たか子、長尾雅樹、中平 耀、なべくらますみ、原 詩夏至、韓 喜徳、安川登紀子（敬称略）の十五名であった。

◆四月十四日（木）午後九時二六分に熊本地震が発生した。益城町では震度7を記録した。その後も余震が続き、震源は大分地方へ移り、やはり震度7の本震が発生したとのことである。震度1以上の余震は二週間後の今でも続き千回を超えるものと思われ、今なお被害は拡大している。自然災害を前にすると人間の非力を痛感するばかりであるが、東日本大震災の福島第一原子力発

電所の事故のように人的災害へ拡大しないことを祈るばかりである。放射能被害に対しての科学的処理が未だ確立されていないのであるから、やはり放射能を制御する研究が進展して完成するまでは原子力の利用は控えるべきではないだろうかと思う。粉末とか液体のようなものを掛ければ放射能が無くなるようになれば良いと思うが、そのような物質が完成するまで原子力の利用は保留すべきではないだろうか。尤も、その様な物質が出来れば原子爆弾の威力も低下するだろうから、為政者たちは歓迎しないのかもしれない。もしもその様なことがあるなら誠に悍ましい心根であり、人工知能がヒトラーを賛美するが如く、良識も倫理も哲学も無いのである。人工知能が、時間制限のあるチェスや将棋や囲碁でいくら人間に勝っても、短絡的に早急に解答を出さない処にも人間の知恵があり、真の解答があることを理解すべきである。それは懐疑する方法を含むものであり、人工知能が最も苦手としている処のように思う。熊本地震の被災者の皆様も、真の解答を求めて一日も早い復興をお祈りしたい。

◆多くの詩人や著者から紙媒体による新刊の詩集、単行本及び詩誌等を頂戴した。失礼と思いつつも殆どお礼状も差し上げていない。最近ご恵贈賜ったものの表題、著者名（発行者名、編集者名又は執筆者名）及び出版社名などを掲載して、この場を借りて深謝する。なお、詩誌等の刊行物は最新号のみを表記した。（順不同・敬称略）

詩集『トーキョー・トレンチ』中島裕之（自家版）

詩集『森が棲む男』宇佐美孝二（書肆山田）

詩集『丸血留之賦』大塚欽一（泊船堂）

詩集『to coda』清野裕子（土曜美術社出版販売）

詩集『頬笑む家』西村啓子（土曜美術社出版販売）

詩集『一杯のラーメン』横倉修一（土曜美術社出版販売）

詩集『日本昆虫詩集』菊田守（土曜美術社出版販売）

詩集『異界だったり現実だったり』勝嶋敬太・原詩夏至（コールサック社）

詩集『残り物には福があったり毒があったり』勝嶋敬太・原詩夏至（自家版）

詩集『文人達への哀歌』山口敦子（土曜美術社出版販売）

詩集『時調（三行詩）第十七集』金一男・出雲筑三ほか（時調の会）

詩集『葵生川 玲 詩集』（新・日本現代詩文庫127）葵生川 玲（土曜美術社出版販売）

『続・宮沢賢治のヒドリ』和田文雄（コールサック社）

『ひらめきと、ときめきと。』秋亜綺羅・柏木美奈子（あきは書館）

『「歴史とは何か」の歴史』樟家重敏（晃洋書房）

『ジジ&ババの気がつけば五〇カ国制覇』風間宗祐（牧歌舎）

「アンドレ」十一号（宇佐美孝二）

「外狩り雅巳の世界 2015」（伊藤昭一）

「揺蘭」（西野りーあ）

「ZOWV（ゾラヴ）」通巻四五号（原詩夏至）

「風樹」十九号（大塚欽一）

「ERA（第三次）」六号（川中子義勝）

「ぱびるす」一一五号（頼 圭二郎）
「金木犀」十八号（菊田 守）
「アンドレ」十一号（宇佐美孝二）
「山脈（第二次）」十五号（鈴切幸子）
「竜骨」百号（高橋次夫・友枝 力）
「流」四四号（西村啓子）
「現代詩研究」七六号（渡辺元蔵）
「極光」二五号（原子 修）
「幻竜」二三号（清水正吾）
「解纜」一六〇号（西田義篤）
「死霊」三号（黒羽英二）
「飛揚」六二号（葵生川 玲）
「人民の力」一〇五〇号（人民の力編集委員会）
「流域」七六号（市川慎一）

◆「パープル」第四九号は二〇一六年十一月一日登録予定である。

高村昌憲個人誌 パープル (第48号)

2016年5月登録

<http://p.booklog.jp/book/106441>

著者：高村昌憲

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/106441>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/106441>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ